

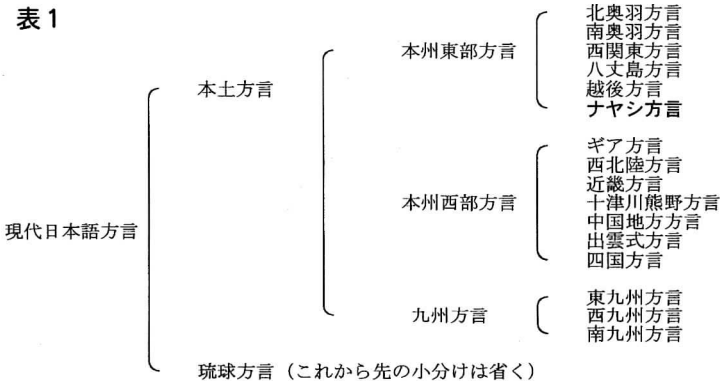
上田の方言

出野 憲司

1. 全国方言から見た上田方言の位置

1-1 全国方言からみた長野県方言の位置

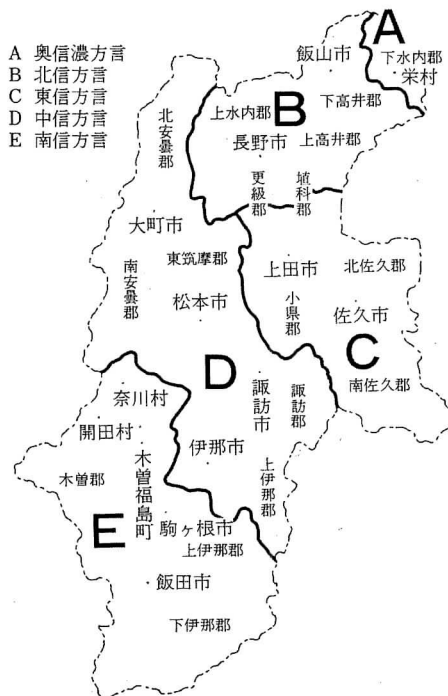
次に示す表1は、都竹通年雄氏による、日本語方言の区画（注1）です。この分類によると、長野県方言は、「ナヤシ方言」に区分されることになります。「ナヤシ」とは、「長野県・山梨県・静岡県」の最初の音を並べて総称したものです。ちなみに、「ギア方言」とは、「岐阜県・愛知県」の最初の音を並べたものです。この「ナヤシ方言」とは、「長野県・山梨県（ただし都留地方の方言を除く）・静岡県（ただし浜名湖から西を除く）」の他、伊豆七島のうちで、伊豆大島から御蔵島までを含む地域に行われている方言にあたります。



1-2 長野県方言から見た上田方言の位置

馬瀬良雄氏によると、長野県方言の区画図は、図1のようになります。
この図によると、上田方言は、東信方言に区分されることになります。

図1



1-3 東信方言の特徴

では、東信方言は、どのような特徴があるのでしょうか。主なものを次に記してみます。

①「イ」と「エ」の混同

北信方言では、「イ」と「エ」の混同が顕著で、人によっては「息」と「駅」の区別がない場合があります。それほどではありませんが、東信方言では「イ」と「エ」の混同がみられます。

(例)「隠居」→「エンキョ」、「因業」→「エンゴー」、
「上田」→「ウイダ」

②「ウ段」と「オ段」の混同

これも、北信方言ほどではありませんが、東信方言にも認められます。

(例)「タ立」→「ヨーダチ」、「犬ころ」→「エノコロ」

③「シュ」「ジュ」の直音化

「シュ」「ジュ」が「シ」「ジ」に発音されることがあります。

(例)「巡査」→「ジンサ」、「主人」→「シジン」、
「順々と」→「ジンジント」

④連母音の融合が顕著

例えば、「赤い」をローマ字で書くと「a k a i」となります。この時、[a i]と母音が連続しています。これを連母音といいます。これが、[e ʌ]（エー）となることを「融合」と呼びます。つまり、「赤い」を「アケー」と発音するようなものを、連母音の融合と呼びます。東信方言ではこの特徴が、顕著に表れます。

(例)「愛想」→「エーソ」、「白い」→「シレー」、
「寒い」→「サビー」

⑤促音の挿入

「鼻紙」を「ハナツカミ」、「川縁」を「カーップチ」と発音するような特徴です。

⑥「ヒ」と「シ」の区別がない

佐久地方では、「ヒ」と「シ」の混同が顕著で、その区別を欠いている人もいます。この特徴は、「江戸弁」の特徴ともされますが、佐久地方のことばが、江戸っ子ことばに近いとされる理由の一つかも知れません。

(例)「朝日」→「アサシ」、「ヒューズ」→「シューズ」、
「ひょっこり」→「ショッコリ」

⑦「北」「雪」などのアクセント

「橋」は「ハ」より「シ」が高く発音されます。一方、「箸」は「ハ」が「シ」より高く発音されます。これをアクセントと呼んでいます。

「北」「雪」「音」「石」などの語は、「2拍2類」というグループに分類されます(注2)。これらに、助詞の「を」が付くと、共通語では、「○●▽」と発音されます。この時、「○▽」はそれぞれ低く発音されることを意味し、「●▽」はそれぞれ高く発音されることを意味します。また、「▽▼」は助詞を表します。つまり「北」を例にとって示してみると共通語では、「北を」は「○●▽」(「タ」だけが高く発音される)となるということです。北信方言では、このグループの語は、「○●▼」と発音されますが、東信方言では、語によって「○●▽」と「○●▼」とに分かれるところに特徴があります。

⑧推量表現が多様

例えば、「雨が降るだろう」と言うとき、北信方言に近い地域では「フルダラズ」を、佐久地域に近づく「フルズラ」を、また、群馬県に近い地域では、「フルペー」が使われます。

2. 「長野県言語地図」から見た上田方言

『長野県史 方言編』(馬瀬良雄氏)には全200葉の言語地図が掲載されています。以下、その言語地図を参照しながら、長野県方言の中の上田方言の特徴について見ていきたいと思います。

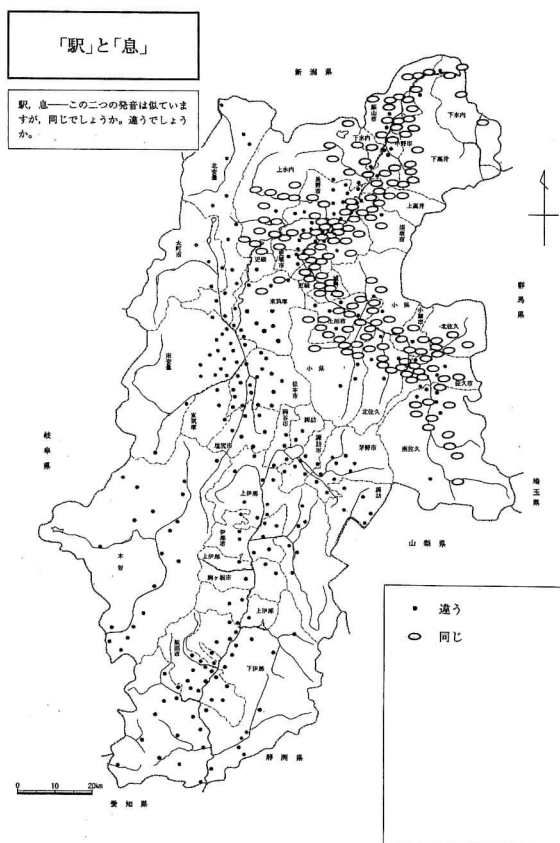
2-1 音韻から見た上田方言

2-1-1 「イ」と「エ」の混同

図2は、「駅」と「息」の区別があるかどうかという地図です。これによると、上田方言では、「同じ」と答えた人が多いことがわかります。つまり、「イ」と「エ」の区別がないということになります。この特徴は、北信方言にも見られます。新潟県では、「イ」あるいは「イ段音」のいくつかを欠く方言が多いという特徴があります。

このような特徴が現れる原因として、上田方言では共通語に比べ、「イ」と「エ」の調音点が近いということが挙げられます。

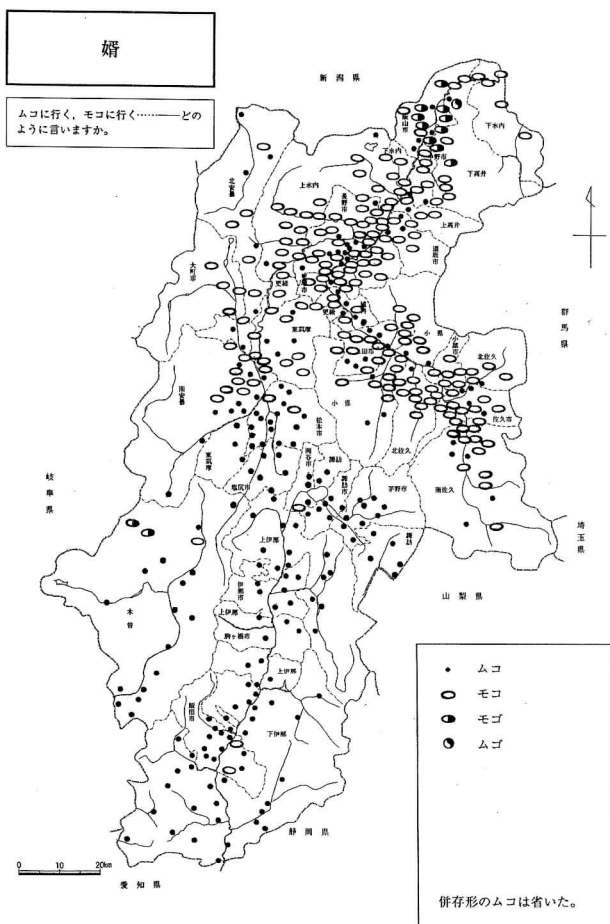
図2



2-1-2 「ウ段」音と「オ段」音の交替

図3は、「婿」を「ムコ」と発音するか、「モコ」と発音するかという地図です。これによると、上田方言では、「モコ」と発音されることが多く、「ウ段」が「オ段」に転訛しているということになります。これは、「ウ段」が「オ段」に転訛する例の方が多いようですが、「風呂敷」→「フルシキ」、「本当に」→「フントーニ」のような例もあります。旧更埴市森では、「ヌ」は「ノ」で対応しており、「ヌ」という音を欠いています。(注3)

図3



2-1-3 「シュ」「ジュ」が「シ」・「ジ」と発音されることについて

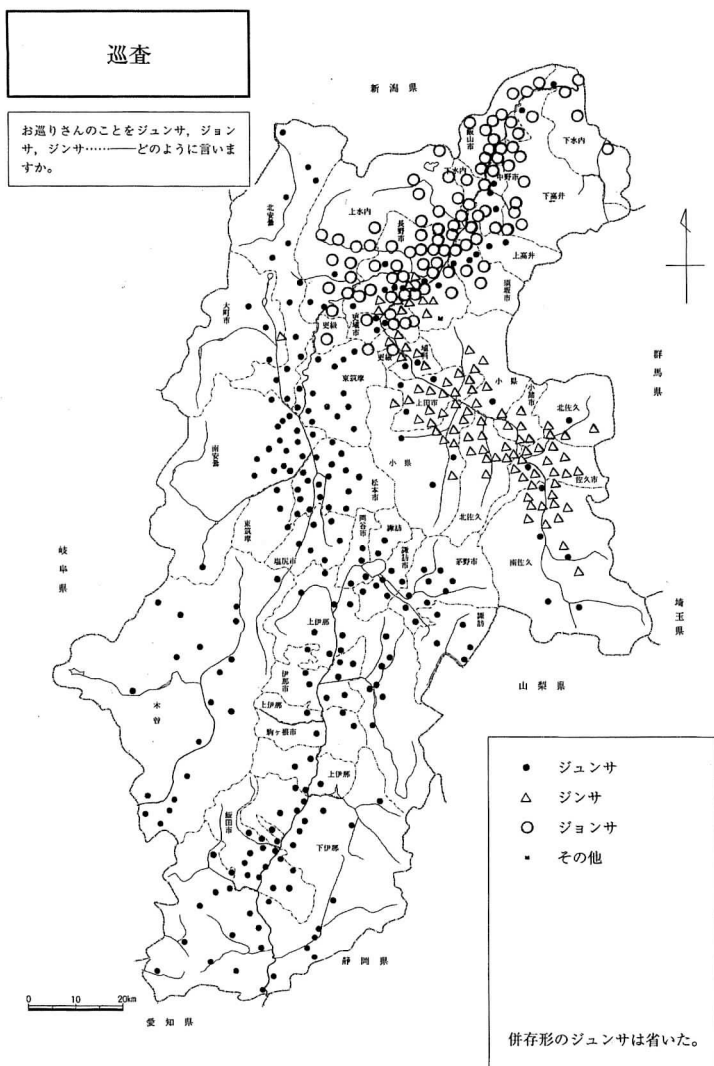
これは、西関東方言をはじめとして、広く見られる現象ですが、表2のように、違いも見られます。「新宿」を「シンジク」と発音するのは、東京・神奈川にも見られる特徴になりますが、「シュ・ジュ」の後に、撥音が付く「順番」を「ジンバン」と発音するのは、少し地域が狭くなります。また、「シュ・ジュ」の後に、長音が付く「柔道」を「ジュードー」と発音するのは、上田方言でも見られず、茨城や栃木に見られる特徴となります。

図4によると、この特徴は、長野県内では東信方言の特徴と言えます。「ウ段」音と「オ段」音の交替の顕著な北信方言では、「ジョンサ」と発音されていることがわかります。

表2

語 例	東京・神奈川	群馬・千葉	上 田	茨城・栃木
新宿	シンジク	シンジク	シンジク	シンジク
順番	ジュンバン	ジンバン	ジンバン	ジンバン
柔道	ジュードー	ジュードー	ジュードー	ジュードー

図 4



2-1-4 連母音の融合

図5は、「無い」をどのように発音するかを示したものです。これによると、全県で、融合した「ネー」あるいは「ネエ」が使われていることがわかります。上田方言でも、融合が顕著だという特徴が見られますが、図6「沸いた」では、ほとんど融合が見られません。融合が顕著な伊那谷との差が認められます。

図5

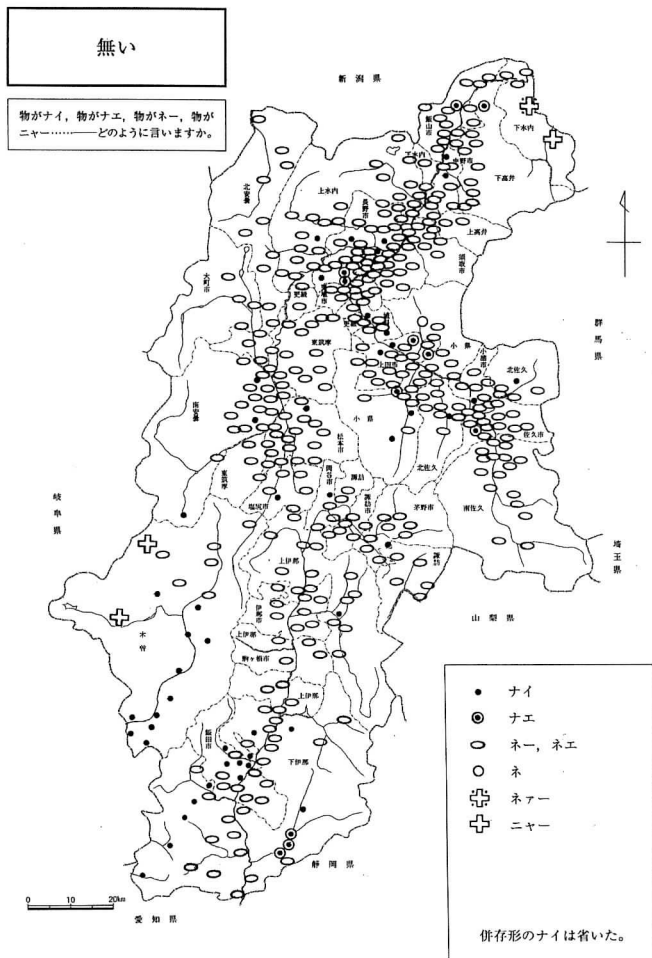
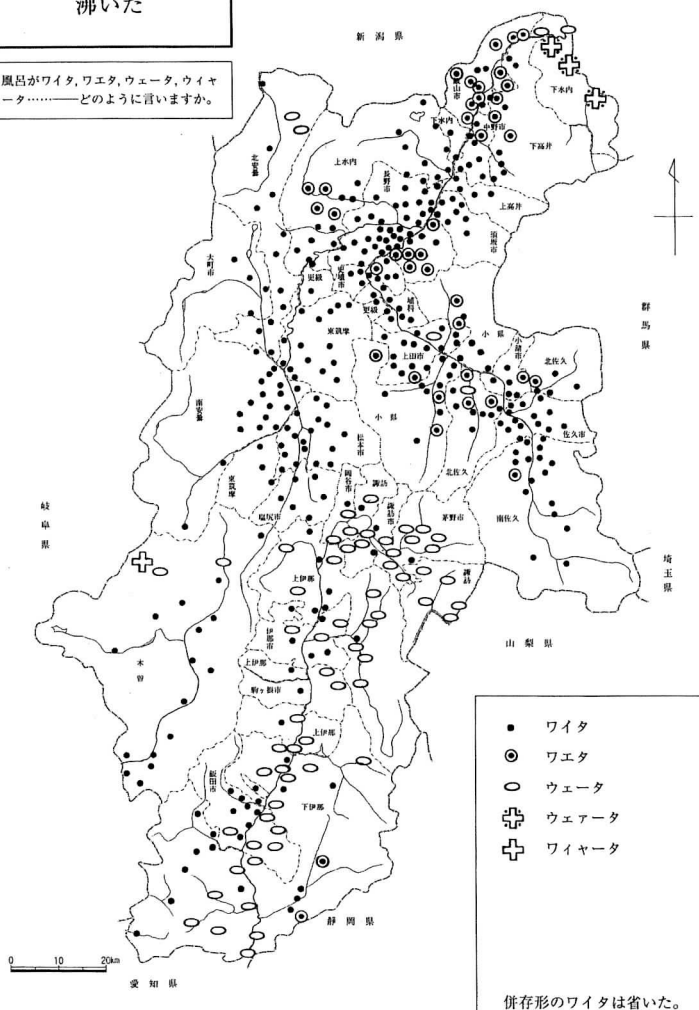


图 6

沸いた

風呂がワイタ、ワエタ、ウェータ、ウィヤータ……—どのように言いますか。



2-2 アクセントから見た上田方言

2-2-1 2拍2類の語

図7・8は、「音が」・「石を」を「○●▽」と発音するか、「○●▼」と発音するかを示したものです。前者は、共通語と同じ特徴であり、後者は新潟県方言と同じ特徴ということになります。これによると、「音が」は、上田方言では共通語と同様のアクセントであることがわかりますが、「石を」では、新潟県方言と同様のアクセントと言えます。

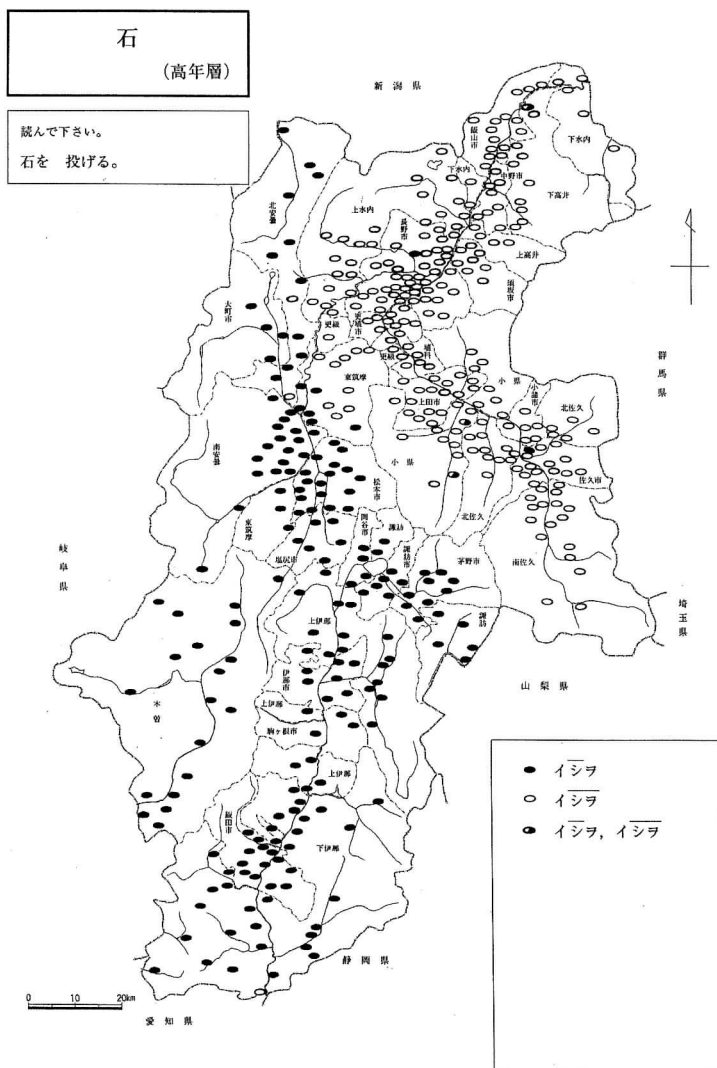
この「○●▽」→「○●▼」という特徴は、千曲川を下るに従って顕著になっています。

2拍2類の語のうち、「○●▼」のように発音する語を表3に示します(注4)。

表3

地 点 名	「○●▼」と発音される語
柴村秋山郷方言	痣・石・岩・音・紙・川・北・鞍・下・蔓・梨・橘・旗・肘・人 胸・村・雪・型・癖(20語)
飯山市富倉方言	石・岩・音・紙・川・北・鞍・蔓・梨・橘・肘・人・胸・村・雪 型・癖(17語)
長野市栗田方言	石・岩・音・紙・北・蔓・梨・橘・肘・人・胸・型・癖(13語)
川中島方言	石・音・紙・北・蔓・梨・人・胸・癖(9語)
上田方言	石・北・梨・人(4語)

图 8



2-2-2 「長野」

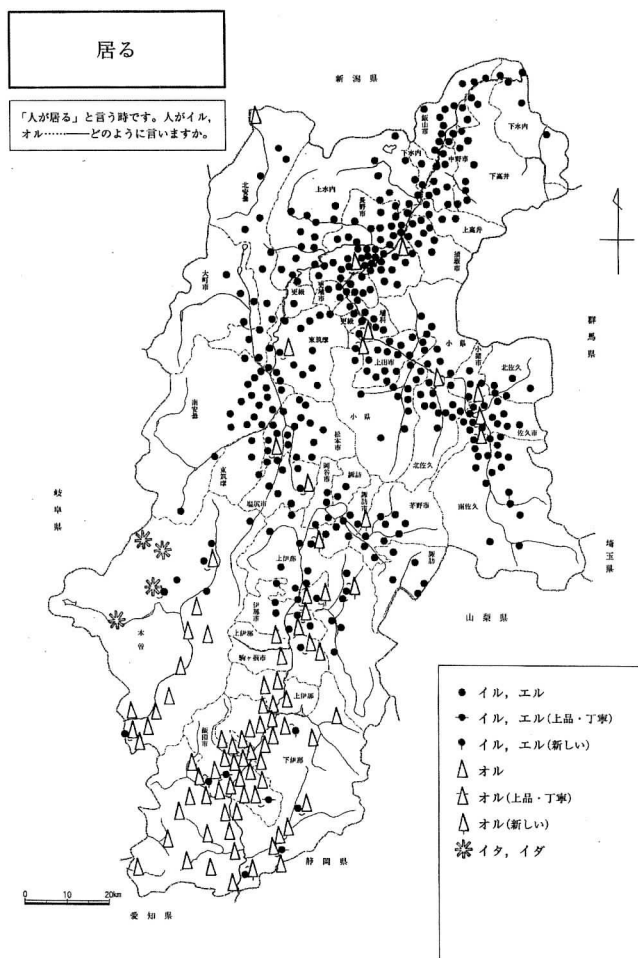
図9は、「長野へ」をどのように発音するかを示したものです。上田方言では、「○●○▽」と発音されることに特徴があります。それが、旧更埴市あたりでは「○●●▽」と発音されるようになり、それより北では「○●●▼」になります。共通語では、「●○○▽」と発音されるようですが（注5）、そのような発音は、長野県内ではほとんど見ることはできません。ただし、最近では、特に若年層を中心に「●○○▽」が増えているようです。なお、地名のアクセントは、その地域以外の人が発音する場合、最初の音だけを高く発音することが多いようで、地元の人には違和感を与えることが多いようです。以前、上田市内のある方が、テレビなどで「信濃」を「●○○」と発音されるのを聞き、「支那の」と聞こえたとおっしゃっていました。

2-3 文法から見た上田方言

2-3-1 人が「イル・オル」

図10は、「人がいる」と言うとき、「イル」を使うか「オル」を使うかというものを示したものです。周知の通り、東京では、「人がイル」と言いますが、関西では「人がオル」と言います。長野県では、南信地方では「オル」を用い、関西方言の特徴が現れていることがわかります。

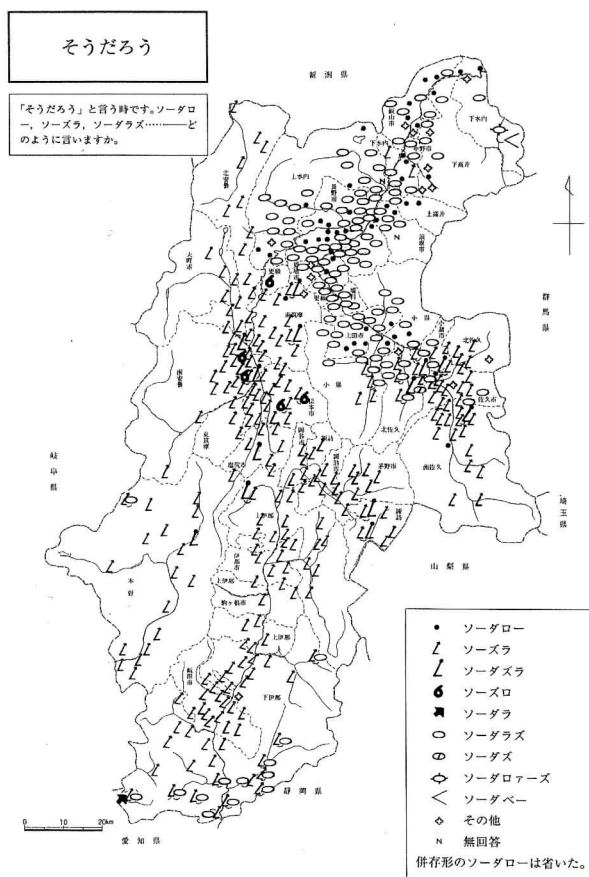
図10



2-3-2 推量表現

図11は、推量表現の様子について示したものです。上田方言では、推量表現として、「ソーダラズ」のように、「ダラズ」が使われます。これは、北信方言にもつながる特徴です。ナヤシ方言の推量表現として有名な「ズラ」が、県内で広く用いられているのと対照的です。上田方言でも、「ズラ」を用いるという報告もあります。ある方は、「ソーダラズ」の方が「ソーズラ」よりも確信度が高いとおっしゃっていました。あるいは、その反対の印象を持っている方もいらっしゃいました。いかがでしょうか。

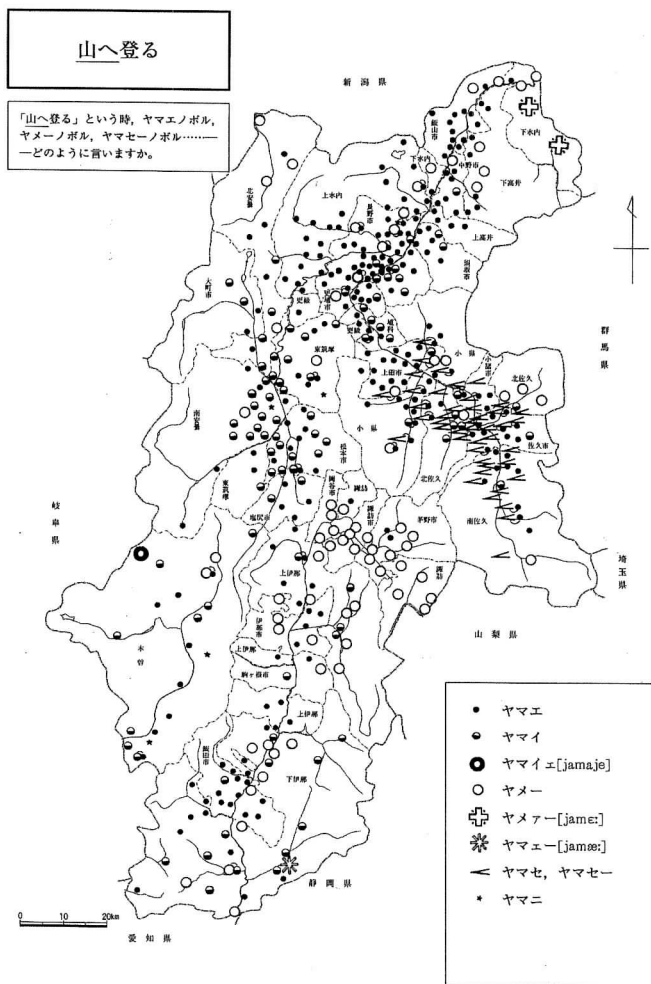
図11



2-3-3 山セ登る

図12によると、「方角」などを表す「へ」を「セ」という表現で表すのは、東信方言に見られる特徴であることがわかります。この「セ」は、関東方言の特徴ですので、群馬県境に近い方にその特徴がはっきりと見られます。上田方言では、佐久方言との境近くで使われます。

図12



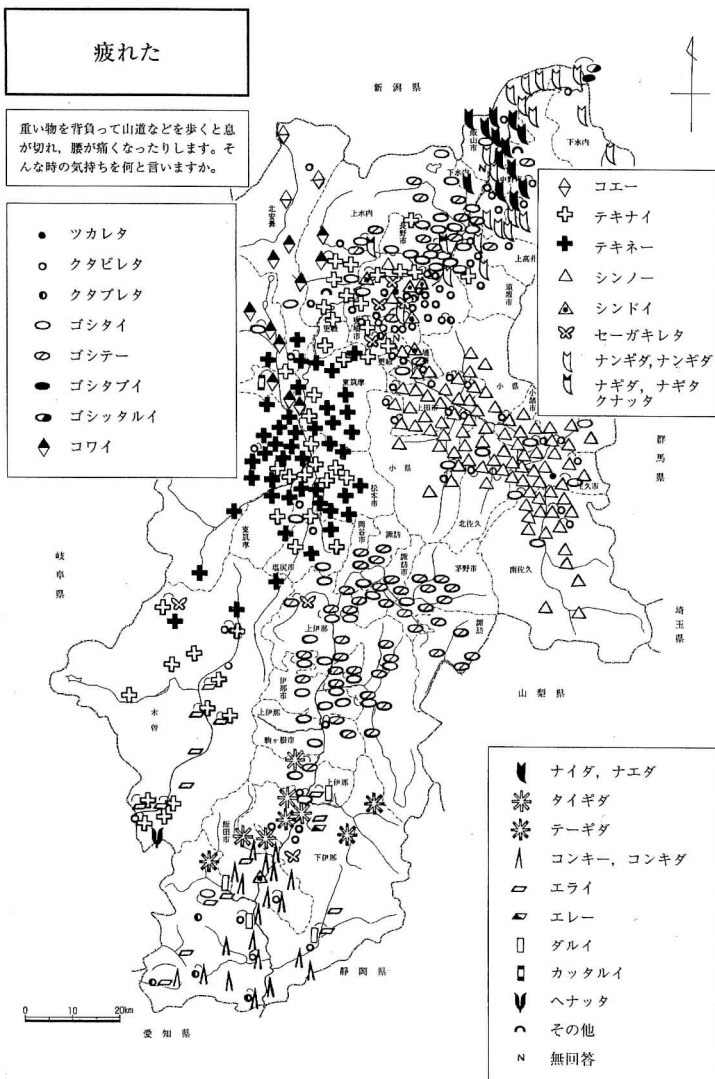
2-4 語彙から見た上田方言

2-4-1 疲れた

図13は、「重い物を持って山道を歩いた時の気持ち」をどのように言うかの分布です。長野県内では、実にさまざまな語形が用いられていることがわかります。これによると、東信方言一帯では、「シンノー」が広く使われています。「シンノ」と短く発音される場合も多いと思います。この「シンノー」は「心労」の変化したものだと考えられます。このような表現は、石川・福井・岐阜・三重・京都・大阪・広島・愛媛・鹿児島まで広く用いられています。

ただし、この地図は、「重い物を持って山道を歩いた時の気持ち」ですので、「病気の時」や「心に心配事を抱えた時」などは違った表現が用いられるのかも知れません。

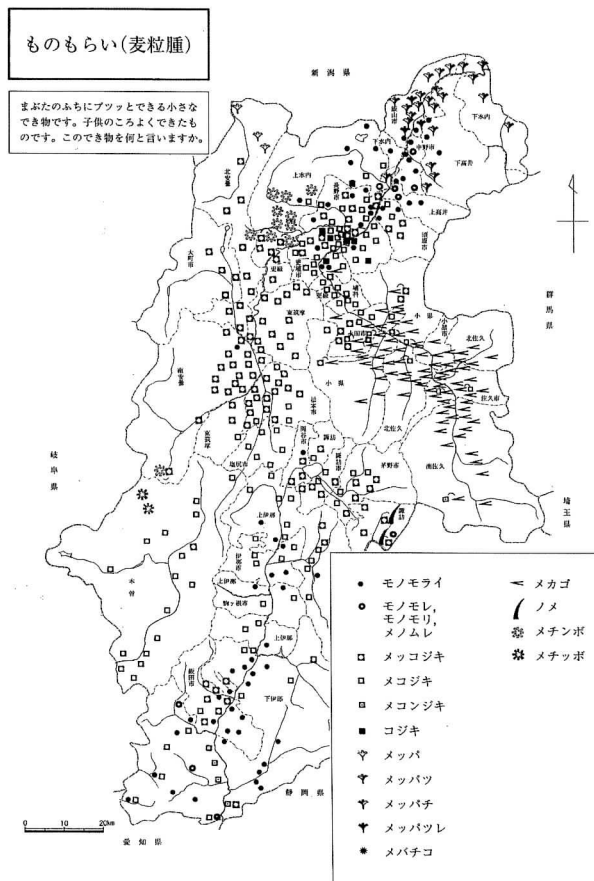
图13



2-4-2 ものもらい

図14は、「麦粒腫」をどのように言うかの分布です。東信一帯では、「メカゴ」が広く使われていますが、これは民間療法と関連があります。「メカゴ」の地域では、井戸に「カゴ」を被せて呪文を唱えたと治るとか、「メコジキ」の地域では、近所に行って物をもらってくと治るといったものです。「メカゴ」は、群馬・栃木・埼玉にかけて用いられています。それらの地域では「メカイゴ」という語形も使われています。すると、井戸にかごを被せるという語源説も怪しくなるでしょうか。

図14

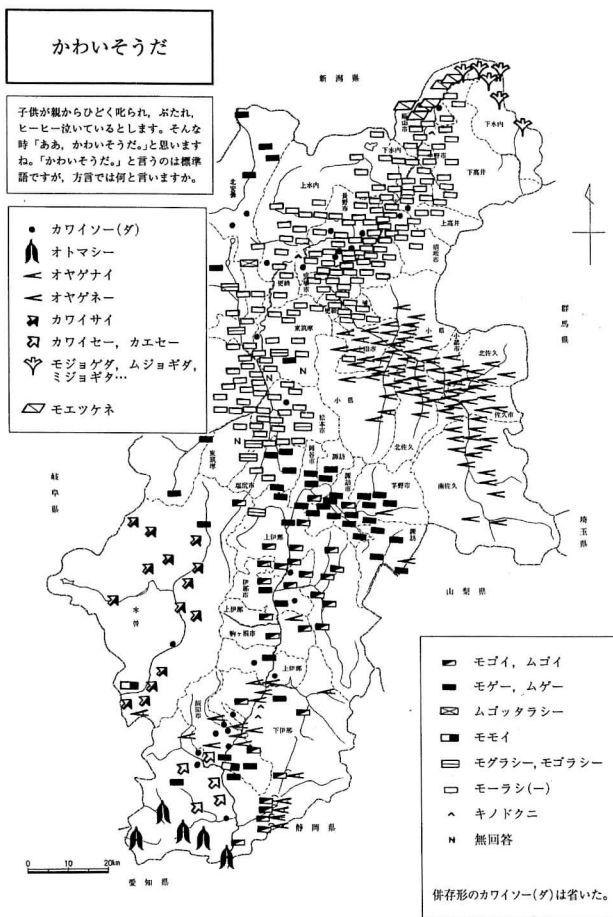


2-4-3 オヤゲネーとモーラシー

図15によると、東信地方一帯では、「オヤゲネー」が使われていますが、上田では、「モーラシー」という地点もあります。「モーラシー」は、諏訪地方の「モゲー」につながることでです。

『上田市誌』によると、「モーラシー」は「命に関わることば」「『酷い』という意味合いの強いことば」「女性のことば」「大人のことば」などという報告もあるようです。

図15



2-4-4 カマケル

「忙しさにかまけてご無沙汰していた」というのは、共通語の言い方です。この「カマケル」は、長野県内だけでもいろいろな意味があるようです。方言集にあらわれる「カマケル」の意味を挙げてみました。

一生懸命仕事をする……信州上田附近方言集・佐久市志・
川中島平方言集・東信濃方言集・南佐久郡誌・
川上村誌・東筑摩方言集

萎縮する。仕事に吞まれる……遠山の言葉

悲しがる……川中島平方言集・松塩筑一安曇地方の方言一

愚痴を言う……下水内の方言・上伊那方言集・川上村誌・
三郷村誌・長野市及び上水内の方言集

小言をいう……東筑摩方言集

心配する……更級郡方言集

嘆く……更級郡方言集・小谷口碑集・下水内郡誌・
小川村誌・北安曇郡方言取調

病気になって気力が弱る……諏訪の方言

口説く……小谷口碑集

『万葉集』に次の歌があります。(巻16・3794)

「愛しきやし 翁の歌に おほほしき 九の児らや 蚊間毛(かまけ)
て 居らむ」(親愛なる翁の歌を聴いて、うっかり者の私たち九人は
すっかり心を奪われています)

一方、『虎寛本狂言集』（財宝）に次の例があります。

「此間は三人共渡世にかまけまして、御無沙汰を致いて御座る」

（このごろは三人とも生活に気を取られてご無沙汰しています）

古く「心を奪われる」意味だった「かまける」が、近世には「あることに気を取られて心を煩わす」「他をなぞりにして、あることだけにかかわる」の意味に変わってきます。上田方言他の「一生懸命働く」は、『万葉集』の「心を奪われる」が、「一つのことに専心する」の積極的な意味に変わり、それが次第に変化した結果と言えるでしょう。一方、「愚痴を言う」「嘆く」は、「心を奪われる」が「気を取られる」の消極的な意味に変わり、それが次第に変化した結果と言えるでしょう。

3. 上田方言の位置

上田方言は、東京と同じ関東方言とかなり近いことと言えます。あるいは、関東方言の古い形を残している方言と言えます。上田方言の話し手が、「共通語とほとんど変わらない」という印象を持っていることとつながります。しかし、音韻やアクセントの面では、越後方言と同様の特徴を備えた方言とも言えます。ただし、この特徴は、次第に稀薄になってしまっていることも事実です。

<注>

（注1）「日本語の方言区分けと新潟県方言」（『季刊 国語』6 1949年）

（『論集 日本語研究 10』1986年 有精堂 に再収）

（注2）平山輝男『日本語音調の研究』（1957年 明治書院）「音調調査語彙」、国語学会編『国語学辞典』（1955年 東京堂出版）「国語アクセント類別語彙表」などを参照のこと。

（注3）中條修「長野県更埴市森方言の音韻体系」『都大論究 8』（1969年）

（注4）『長野県史 方言編』p100～101を参照にまとめた。

（注5）『日本語発音アクセント辞典 新版』（1998年 NHK出版）

参考文献（＜注＞に示した文献を除く）

馬瀬良雄（1971）『信州の方言』（第一法規）

馬瀬良雄（2003）『信州のことば 21世紀への文化遺産』（信濃毎日新聞社）

尚学図書（1989）『日本語方言大辞典』（小学館）

平山輝男他（1992～1994）『現代日本語方言大辞典』（明治書院）

上田市誌編さん委員会（2003）『上田市誌 民俗編 昔語りや伝説と方言』
（上田市）

出野憲司（1987）「上田・佐久方言の音韻・アクセント」（『国語研究 50』）

